

氏名：菅 開智 受験番号：1600103

本の番号：9 タイトル：「病魔という悪の物語—チフスのメアリー」

感染症が拡大するときには、症状がなく病原菌を保菌し他人へ移してしまう「健康保菌者」の存在がある。この本は無症状のチフス菌保菌者の女性により周りの人々へ料理を介して広がった感染の恐怖と彼女自身が強いられた長い隔離生活を取り上げている。

女性の名前はメアリー・マローン、アメリカに移住したアイルランド移民で料理好きな賄い婦である。雇い主の信頼も得て日々まじめに働いていた。しかし、37歳を境に人生が変わった。彼女の周囲で腸チフスの発生が次々起こりはじめたのだ。腸チフスにかかるとう体温が40度前後にまで上がり発疹が現れ脾臓が腫れ上がる。高熱が長く続くと腸に内出血が起きたり穴が空いたりして腹膜炎を起こすこともあり、当時では致死率の高い病気であった。しかし、いったいなぜ集団発生が起こったのだろうか。調べていくうちに一人の賄い婦にたどり着いた。彼女の雇われた先で過去にも次々とチフスの集団発生が起こっていたことが明らかとなる。調査していた衛生局は、疑わしいメアリーを検査し、結果によっては隔離や胆のう摘出手術をさせようとする。それに対し、身に覚えがないためメアリーは納得できず抵抗した。だが、糞便の検査は陽性だった。ただ、毎回陽性かというところではなく、陰性を示すこともあった。彼女の島での最初の隔離生活は約3年間続き、その後何度目かの裁判を経て、ようやく料理に関わる職に就かないことを誓約した上で、自由の身となる。だが、自由を求め訴訟を起こす段階で、メアリーは新聞の一面を「医学史上有名なものになった挿絵」とともに個人名で大きく取り上げられてしまう。その挿絵とはフライパンに卵のようにみえる頭蓋骨を入れ料理するエプロン姿の女性の姿だった。メアリーの社会的なイメージは、最後までこの絵から完全には逃れられなくなる。そして約5年後、彼女は再び逮捕され同じ隔離島に引き戻されてしまうこととなるのだが、それはニューヨークの婦人科病院でチフスの集団発生が起こり死者も出てしまったからだ。メアリーは誓約をしていたにもかかわらず、その病院で名前まで変えて賄い婦として働いていた。これにより再び始まった周囲2キロにも満たないほどの小さな島での隔離生活は、

ついに死を迎えるまで続くこととなる。 1600103

この本は、現在のコロナ禍の状況など知るはずもない2006年に初版が発行された。にもかかわらず、今の社会で起こっている感染の恐怖からくる新型コロナ感染者への誹謗中傷や差別的扱い、隔離や都市封鎖、そして無症状のため知らず知らず他人へ移してしまう保菌者による感染拡大など、作者が文中で書いている「未来のチフスのメアリーを同定し、恐怖を覚え、隔離し、嘲り、貶めるという構図は、いつ繰り返されてもおかしくはない。」という言葉に全てあてはまることが予言のようでとてもすごいところだ。そしてメアリーの件から、100年あまりが経った今本当に繰り返され、今を実際に私たちは生きて日々経験していることがとても不思議なことに感じる。いずれこの先、新型コロナの感染の一連の流れが、この本のように歴史に名を残すことになると思った。

今回、書評の課題によってこの本に出会えたことで過去に同じような感染拡大が引き起こされ、それに伴う隔離があったことを知ることができたことがとてもよかったと思う。

現在もコロナ禍での無症状者・軽症者のホテルへの隔離、自宅待機要請が行われている。なにより新型コロナの感染への恐怖が今以上に未知のものだったときの、連日のテレビで報道され続けた横浜港でのクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」の乗員乗客が下船を許されず港に停泊したまま船内での隔離生活を余儀なくされたことは、まさに不特定多数の命の危険の前には少数の自由を制限するということだったと思う。もしかしたら自由の制限が誰に対しても等しく行われるなら仕方ないことなのかもしれない。しかし、メアリーの場合、彼女だけが無症状の保菌者ではなかったのに、移民・カトリック・貧困・女性・独身などの社会的条件が長い隔離生活に影響を与えたのかもしれないところが問題である。

この本により考えさせられた点は、個人の自由を制限することにより不特定多数の命を守ることに、これをどの程度優先させるべきなのかということだ。私は多数の前には少数の犠牲が当然だとはとても思えないが、個人の自由が誰かの命を奪う可能性があるなら、制限は仕方ないことだとも思う。しかし、考えても考えても正解は私にはわからない。読んだ後もこんなに考え続けなければならない本にはじめてであえた。